「カイロ通信」第 6 号　　［2026 年 4 月 24 日記］

エドワード・サイードと“コロニアル・ザマーレク”

日本学術振興会カイロ研究連絡センター長　長沢 栄治
（前・信州イスラーム世界勉強会代表）

〔燕たちの再訪〕

イスラームの断食期間、ラマダーン月が始まった。その初日、2 月 19 日の朝、空を見上げると、燕（つばめ）たちが飛んでいた。そういえば、しばらく前から、その鋭い鳴き声が聞こえていたような気もする。すでに飛来してから日にちが経っていたのかもしれない。ただし、まだ十羽ほどの数であった。そのうち姿を見かけなくなったな、と思っていたら、ラマダーン月が終わる頃になって、数を増やした群れにふたたび会った。

イフタール（断食明け夕食）の遊覧船からのナイル川の夜景

この神聖なラマダーン月の最中、2 月 28 日に、イスラエルと米国によるイラン攻撃が始まった。燕の飛行と同じく、この空からの侵攻も予測は難しい。もっとも、燕の群れの飛行経路やタイムスケジュールは、各地で観察を続けていけば、かなり正確に把握できるだろう。それとは違うが、そこまでやるか、と思ったイランへの侵攻も、筋だった一連の動きであった。一続きの事態の動きの流れとして理解する方が本筋である。今回の侵攻は、直接的には 2023 年 10 月のイスラエルによるガザ攻撃に流れを発する。つまりはパレスチナ問題がその根っこにあるということである。この点について多くの人の目が曇らさせられ、危機の本質が隠されている。

この戦争をめぐって「イラン情勢の悪化」という言葉が報道で繰り返し使われている。これでは石油・天然ガス価格の高騰は、すべてイランの側に責任があるという印象を与えかねない。まさにそのために意図された表現であろう。問題の本質を隠蔽するメディアの操作が、困ったことにメディアの当事者にとってまったく無自覚のまま行なわれている。エドワード・サイードが『イスラム報道』（邦訳 1986 年初版）で指摘した「戦争とプロパガンダ」の世界が今も続いている。問題の「火元」がほとんど問われることなく、この「火元」の火を止めることもなく、世界中の人たちが「新たな石油危機」に右往左往している［注 1］。

振り返れれば、1948 年のシオニスト国家の建設で決定的となったパレスチナ問題の深刻

化は、中東石油をめぐる確執と合流することで、ときに激流となって、この地域を襲い、世界全体を揺るがしてきた。今回のイスラエル・米国の侵攻がもたらしたのは、その何回目かの激流である。

〔『オリエンタリズム』をめぐる思い出〕

戦争勃発のために、湾岸経由のフライトは大混乱になった。当地カイロでも調査に来ていた研究者が帰国の便の変更に苦労し、二つの研究チームがエジプトへの渡航を断念した。そして自身も予定していた一時帰国の予定をキャンセルすることになった。ただし、戦争の余波がもたらした思わぬ幸運にも恵まれた。恩師の奴田原睦明（ぬたはら　のぶあき）先生が、戦火を避けてアラビア半島からカイロに来られたのである。およそ三十年ぶりにお話をして夢心地のひとときを過ごした。

さて、今回の一時帰国で予定していたのは「エドワード・サイード『文化と帝国主義』を読む」という研究報告であった。サイードといえば、『オリエンタリズム』（邦訳 1986 年）の著者として知られている。同書の訳者である今澤紀子さんは、信州イスラーム世界勉強会で、一昨年の 2024 年度に「オンラインアラビア語講座～詩と音楽で言葉に親しむ～」を開講してくださった。また同書の翻訳の監修者の一人は、この勉強会の初代代表の板垣先生である。

しかし、正直なところ、サイードの著作の世界には、なかなか入り込めないできた。『オリエンタリズム』の邦訳と同じ時期に読んだポール・コーエンの『知の帝国主義―オリエンタリズムと中国像』（1984 年）の方が親しみやすかった。研究者としての成熟が遅かったと言われれば、それまでのことであるが。サイードの凄さがようやく実感できたのは最近、『文化と帝国主義』を原文と参照しながら再読してからである。

さて、大学を卒業してアジア経済研究所に就職し、中東研究に従事することになった頃のことである。ぜいたくなことに当時、奴田原先生によるアラビア語の個人授業を受けた。授業が終わると、日暮れどきの池袋北口の中華料理屋で、その後、授業の場所を志木のご自宅のマンションに移してからは奥様、捷子さんの手料理で毎回、至福の時を過ごした。たびたび振り返って思うことだが、研究者生活、あるいは社会人生活で一番、精神的にも落ち着いた、幸せな時期であった。

そんな日々を過ごしていた当時、研究者として最初の仕事となったのが、ロジャー・オウエン「イギリスの現代中東研究」の翻訳であった（『中東総合研究』第 5 号 1976 年 9 月）。オウエン先生は、近代エジプト経済史研究の大家として知られる。中東地域研究の草分けのオリエンタリスト、ハミルトン・ギブ教授と同様、イギリスから米国に渡って後進を指導した。翻訳から数年経って、オウエン先生が来日された際、このエッセイについて訊く機会があった。すると先生は、書いてから 2 年後に『オリエンタリズム』が出たのでもう自分の論考の意味はなくなった、と言うのである。当時は、その“冷たい”応答にがっかりするばかりで、それ以上に深くは考えることはなかった［注 2］。

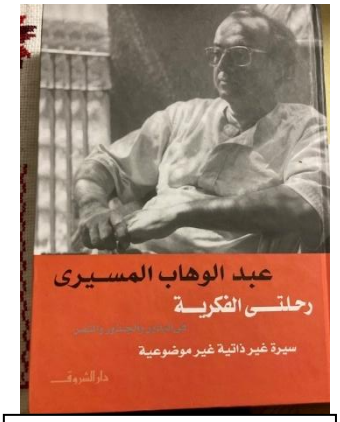
〔サイードとメッシリー〕

サイードの評価をめぐってもう一つ思い出すのは、芝生瑞和（しぼう　みつかず）さんのコメントである。芝生さんは「イスラエルのレバノン侵略に関する国際民衆法廷（IPTIL）」（1982年）やパレスチナ医療協会（JPMA：1986-2011年）を組織するなど、パレスチナ問題に活動家として取り組んだ国際ジャーナリストであった。早世したが、板垣先生とともに IPTIL を組織した小田実さんの後を継ぐ人であった。パレスチナ問題に対して、彼のような関わり方をする研究者は、その後もほとんど見られない。一緒に活動した妻は、彼から次のようなコメントを聞いたという。今、サイードが持てはやされているけど、アラブ世界には彼に匹敵する知識人が、知られていないだけで、本当は山ほどいるんだ、と。

たしかにそうなのだろう。でも、そうした知識人を紹介するのが、地域研究者としての務めの一つだと自身、考えてきた。しかし、勉強不足のため、まだ知らなかったと後悔する、素晴らしい思想家はまだまだいる。たとえば、アラブ世界におけるシオニズム研究者の第一人者、アブデルワッハーブ・メッシリー（‘Abd al-Wahhāb al-Missirī）教授に注目するようになったのは、ごく最近のことである。

1935年に生まれ2003年に没したサイードに対し、メッシリーは、1938年生まれで2008年没である。二人は同時代、同じ課題に立ち向かいながら、並行した人生を歩んだ知識人である。二人に交流があったかどうかまではまだ調べていない。メッシリーは、1975年から79年にかけて、国連のアラブ連盟代表部の文化顧問としてニューヨークに滞在していたのだから、サイードとまったく接点がなかったわけはないだろう。

メッシリーの主著は、浩瀚（こうかん）な『ユダヤ教・ユダヤ教徒・シオニズム大事典』（1999年：アラビア語）である。しかし、同書はたんなる事項を羅列した「事典」ではない。また、晩年のがんとの闘病生活の中で書かれた自伝（2006年）は、彼の思想的到達点を示す内容となっている。同時に、個人史の多くがそうであるように、この本の青少年期の記述には魅了される。ナイル・デルタ北部の商業都市、ダマンフール市で過ごした少年時代の記憶に、深い社会科学的分析が施されているからである。同市を舞台にしたハイリー・シャラビー（Khayrī Shalabī）のピカレスク小説、『ワカーラ・アティーヤ』（英訳 *The Lodging House*：2007年）と合わせて読むと、ナイル・デルタの活気あふれる都市空間が疑似体験できる。



メッシリー教授自伝（2006年）

サイードとメッシリーは、米国の名門大学でそれぞれ英文学を専攻した。エジプトの高校生活では、はみ出し者だったサイードが、追われるように米国に留学したのは1951年のことだった。ただし、そこからは順調な人生行路を進んだ。プリンストン大学を1957年に卒業して、60年にハーバード大学の英文学の修士号、64年に博士号を取得した。他方、三

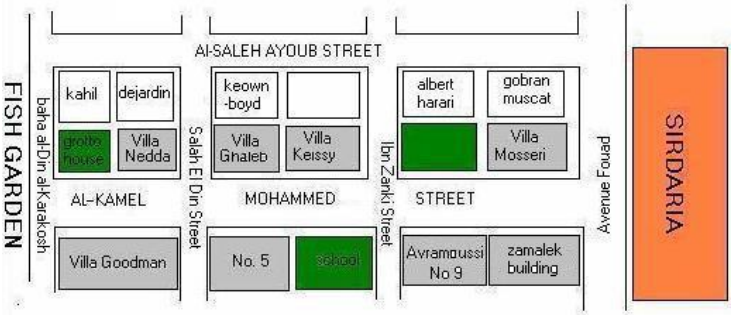
歳年下のメッシリーは、アレキサンドリア大学を卒業した後、留学して 1964 年にコロンビア大学で英文学の修士号を得ている。

しかし、その後のメッシリーの進路は、1967 年 6 月の中東戦争でのアラブの惨敗に大きな影響を受けることになる。彼が自らの眼を疑うほど驚いたのは、留学先のニューヨークの大学キャンパスで、周囲にいる学生や教員がこぞって、イスラエルの勝利への歓喜をあからさまに表したことである。このときの衝撃が、サイードとは異なり、メッシリーを英文学からユダヤ教・シオニズム研究に進ませることになった。

〔エドワード少年と“コロニアル・ザマーレク”〕

前にも述べたように、学振のカイロセンターがあるザマーレクは、東京でいえば六本木や麻布。大使館が集中する高級住宅地である。同地区の歴史やその通りの名前の由来は、またいつか紹介する機会があればと思う。その際に説明するが、この地区は、かつての外国人「租界」的な雰囲気を現在でも色濃く残している。エドワード・サイードは 1937 年、2 歳のとき生まれ故郷のエルサレムを離れ、このザマーレクで少年期を過ごした。いうならば“コロニアル・ザマーレク”の時代である。一家が住居を移したのは、父親がカイロ中心街の目抜き通りで大きな文房具店を開き、エジプトでのビジネスに成功していたからだった。

少年の頃に住んだ家が、学振事務所のある通りから一本隣の通り（アズィーズ・オスマン通り）にあったということは以前から知っていた。しかし今回、サイードに関する研究報告の準備のため、インターネットを検索していると、民間の歴史家、サミール・ラアファト氏が書いた「カーメル・ムハンマド通りのシオニズム」という論考に出会った［注 3］。そして、この学振事務所のある通りがかつてシオニストの活動の重要な拠点だったと知って驚いた。そうすると幼いエドワードは、シオニストたちの陰謀が渦巻く場所のすぐ近くに住んでいたことになる。当時、家の目の前にある公園（かつて水族館があったので“お魚公園（ハディーカト・アスマーク）”と呼ばれる）で無邪気に遊んでいたのだ。



出典：Samir Raafat, “Zionism on Kamel Mohammed Street” (1993)

エジプトのシオニズム運動については、拙著『アラブ革命の遺産―エジプトのユダヤ系マルクス主義者とシオニズム』（2012 年）で、簡単に紹介したことがある。サイード一家が移り住んだ 1937 年当時のエジプトでは、ハショメル・ハツァイル（若き警備員）という左派シオニストが勢力拡大に努めていた。その最大の支部は、カイロ市の東北の郊外、新興住宅地のヘリオポリスにあった。後年、サイードが厳しく批判するオリエンタリ

スト、バーナード・ルイスもこの支部を訪れたことがあった。1938 年だったというから、ルイスは 22 歳の青年、サイードはまだ 3 歳の幼児であったのだが。

シオニストたちは、ヘリオポリスやラムセス中央駅近くのダーヘル（ユダヤ教徒のスポーツクラブの主導権をめぐって共産主義者との抗争事件があった）など、ユダヤ教徒が比較的多く住む地区でその青年層への浸透を図っていた（当時のエジプトのユダヤ教徒人口は 8 万人程度と推測される）。その一方で、エジプトの政治中枢への接近も試みていた。その重要な地区がザマーレクだったのである。

さて、1952 年の民族革命以前のエジプトには、権力の中心が複数あった。形式的には国王の住むアブディーン宮殿であるが、実質的にはその西にあるナイル川に面したイギリス大使館だった。しかし、究極的な権力の中心はどこかといえば、それは川の中州のザマーレクにあるエジプト軍総司令部、シルダーリーヤ（sirdārīya）であった。

シルダーリーヤは、エジプト軍イギリス人総司令官（およびスーダン総督）の別称、ペルシア語起源のシルダール（sirdrār）に由来する。その敷地内には、総司令官の宿舎と英軍諜報部の本部が置かれていた。英軍の情報将校だった T・H・ロレンスも出入りしていたであろう。シルダーリーヤは、1952 年革命後の現在、将校クラブとなっている。学振事務所のあるアル＝カーメル・ムハンマド通りは、この将校クラブの正門から 7 月 26 日通り（革命前はファード国王通り）を挟んで南北に垂直に伸びる通りである。そして、この通りの起点の 3 番地のヴィラ・グッドマンこそがシオニストの活動拠点であった。“お魚公園”に面したこのヴィラから建物一つを挟んで南側にサイード一家がその 5 階に住むアパートがあった。このヴィラ・グッドマンにはエジプト政府の要人も出入りし、また初代イスラエル大統領となるハイム・ワイツマンも訪れたことがあるという。今は立て直されてビルに変わっている。

さらに学振事務所があるアル＝カーメル・ムハンマド通り 9 番地の北隣、11 番地のザマーレク・ビルディングという建物にもシオニストの拠点があった。エドワード少年は、1941 年の秋 5 歳のときゲジーラ・プレパラトリー・スクールに通い始めるが、この学校はザマーレク・ビルディングと隣り合わせ、学振事務所のあるビルとははす向かいで接している（同校は、現在 Gezira Language School の名称で存続している。写真参照）。

〔ハサン・サブリ通りでのモイン卿の暗殺〕

子どもの頃のエドワード・サイードが住んだ家の近くで起きた事件として、1944 年 11 月のイギリス植民地相モイン卿 Lord Moyne の暗殺がある。パレスチナ問題の暗転に大きな影響を及ぼしたこのテロ事件がカイロで起きたことは知っていた。しかし、学振事務所にも近いハサン・サブリ通りがその現場であることは今まで知らなかった。エドワード・サイードは、1942 年 5 月、6 歳のときにエルサレムに戻ったという。とするならば、この大事件が起きた時には近くにはいなかったのであろう。

モイン卿（ウォルター・ギネス 1880-1944 年）は、ダブリン生まれの軍人出身の保守党

政治家である。チャーチル戦時内閣で 1941 年 2 月に植民地相に登用され、42 年 8 月以降はパレスチナを含む中東政策の現地における最高責任者となった。しかし、彼はシオニストにとって“目の上のたんこぶ”的存在であった。当時、モイン卿は、フランスがナチス・ドイツに敗北して以降に流動化した東アラブの状況に対し、イギリスによる新たな地域支配の枠組みを模索していた。それはフランスの委任統治領（シリア・レバノン）を含めた地域連邦の構想であった。シオニストは、この構想がユダヤ人国家建設を妨害するのではと警戒し、彼をアラブ寄りの人物と決めつけていた。モイン卿が連合軍におけるユダヤ人部隊の創設にも反対の考え方を示したことにも反発していた。

モイン卿は、レヒ（シュテルン・ギャング）と呼ばれる修正シオニストの過激派（後にイスラエル首相となるイツハク・シャミルが指導者）によって暗殺された。レヒはその後、パレスチナ国連調整官のベルナドッテ伯爵も暗殺している（1948 年 9 月 17 日）。モイン卿は、1944 年 11 月 6 日のお昼過ぎにハサン・サブリ通りの 4-6 番地にある自宅のヴィラに帰ったところを二人の犯人に銃で撃たれた。犯人たちは、家の前のゲジーラ・スポーツ・クラブの塀の茂みの中で待ち伏せしていた。犯行後、自転車で逃走した二人は、オートバイに乗った勇敢なエジプト人警官によって取り押さえられた。

モイン卿の暗殺現場の今：ハサン・サブリ通り 4-6 番地

モイン卿の葬儀は、ザマーレクのゲジーラ宮殿（現マリオットホテル）裏手にあるオールセインツ教会で営まれ、カイロ市中心部で壮大な葬儀行列が実施された。ハサン・サブリ通りのモイン卿のヴィラは、今では高層ビルに建て替えられている。

事件から 31 年が経った 1975 年、1973 年 10 月の中東戦争後に行なわれた捕虜交換の一環で、モイン卿暗殺犯の二人の遺体がエジプトからイスラエルに移送された。サダト大統領が認めたのである。当時のイスラエル首相イツハク・ラビンは、英雄として迎えて軍隊葬を執り行い、二人の遺体を国立共同墓地、“ヘルツルの丘”に埋葬させた。そのラビンが再び首相となり、オスロ合意（1993 年）を結んだ後に暗殺され、同じ墓地に埋葬されるのは、それから 20 年後の 1995 年 11 月のことである［注 4］。

〔「帝国的分断」の両側に属すること〕

エドワード・サイードは、1935 年に生まれ 1951 年に渡米するまでの 16 年間、パレスチナとエジプトで過ごした。正確にいえばエルサレムとカイロで過ごしたこの少年期の日々は、後年の彼の思想形成に大きな影響を与えた。彼は『文化と帝国主義』の「はじめに」で、次のように述べている。「最後に一点言っておきたいのは、本書が一人の亡命者の本

an exile's book だということです。～中略～ 私が「亡命」"exile"と言うとき、悲しいこととか何かをはく奪されているといったことを意味しているのではありません。むしろまさに帝国的分断 imperial divide の両側に属しているからこそ、それらの両側をより容易に理解できるのです」[注 5]。

「帝国的分断 imperial divide の両側に属している」、つまり「帝国」と「植民地」の両方に足を置いている、と彼が自信をもって述べる根拠のひとつとして、"コロニアル・ザマーレク"での日々がある。

サイード一家は、1947 年 11 月 29 日の国連パレスチナ分割案決議の直後に発生した武力衝突の戦火を避け、同年末、カイロに退避した。エドワード少年 12 歳のときのことだった。彼はそれから二度とエルサレムの生家に戻れなくなった。「回想のカイロ:1940 年代エジプトの交差する文化的流れの中で育って」というエッセイで、彼は"コロニアル・ザマーレク"についての思い出を次のように語っている［注 6]。

エドワード少年はエジプトに戻って、ゲジーラ・プレパラトリー・スクールに再び通うことになった。同校の生徒たちは、エジプト人のムスリムやコプト教徒に加えて、ギリシア人、ユダヤ人、アルメニア人、シリア人など「半分は英国、半分はコスモポリタン」といった構成だった。イギリスの歴史を勉強させられたのは、英国人一家による経営であったからである。大酒飲みの亭主は、学校経営を肥った妻の校長に任せきりであった。この女の校長先生に自分のような素行の悪い生徒は杖でお仕置きを受けたというのであるから、やんちゃな生徒であったようである。

エドワード少年が通ったゲジーラ・プレパラトリー・スクール（当時）

次の年 1948 年にエドワード少年は、名門校のビクトリア・カレッジに進学した。同校は今もカイロ南郊の高級住宅地、マアディーにある。本校のアレキサンドリア（1902 年創設）に続いてこの年に開校したばかりであった。級友には「アラビアのロレンス」（1962 年）や「ドクトル・ジバゴ」（1965 年）で知られる俳優のオマー・シャリフがいた。彼は本名ミシェル・デミトリー・シャハルーフ、1932 年 4 月生まれでサイードとは 3 歳年上のギリシア・カソリック・メルケト派の家出身であった。

英国式教育のビクトリア・カレッジでは、ハリー・ポッターの学寮制度のように、生徒が四つのグループ（ハウス）に分かれて所属していた。エドワード少年はキッチナー・ハウスだった。第 3 代シルダールであったキッチナー将軍（1850-1916 年）に由来するハウスである。シルダールと英国エジプト総領事を兼ねていた将軍は 1914 年、第一次世界大戦の

勃発とともに陸軍大臣に就任した。「英国は君を必要としている」という募兵ポスターで、眼光鋭く指を突き付ける姿は、今でもよく知られている。

さて、エドワード少年は、やんちゃぶりが過ぎたのか、1951 年にはビクトリア・カレッジから放校処分を受けた。「回想のカイロ」では、当時の状況について、エリート養成学校の中で落ちこぼれ、「多種多様な外れ者、与太者、多彩な個性の人たち」の仲間入りをすることになった、と述べている。

また「回想のカイロ」の最後の部分で、彼が「ポーランド系ユダヤ人の小さなノーム［大地の精霊］」と形容する、音楽教師ティーガーマン Ignace Tiegerman（1893-1968 年）について熱く語っている。調べてみると、彼はウラディミール・ホロヴィッツが唯一恐れたライバルだったという天才的な音楽家であった。『文化と帝国主義』をはじめ、サイードの独特の議論には「対位法」など音楽用語がキーワードとして使われている。この音楽的素養もこの時代に培われたものだった。

後年、エドワード・サイードはティーガーマンと教師と生徒の関係を越えて付きあうようになった。二人は「カイロがより私たちのものであった時代、コスモポリタンで自由で、素晴らしい特権で満ちていた時代」を懐かしみあった。ティーガーマンは、「ポーランドのパスポートを保持し続け、エジプトの入管制度、納税、ナセル体制の煩瑣な苛烈さによく耐えつつ」、1967 年中東戦争敗戦の後に亡くなるまでカイロに住んだ。そして一貫して、イスラエルへの移住は拒否し続けた。

〔「帝国的サイクルの自己複製」とパレスチナ問題〕

エドワード・サイードの自伝『遠い場所の記憶』（中野真紀子訳、2001 年）では、一家のホームドクターだったファリード・ハッダード医師の話が出てくる。ハッダードはサイード一家のようなお金持ちの主治医を務める一方、カイロの庶民地区で貧しい人たちの治療にも当たる良心的な医師であった。しかし、ナセル政権による共産主義者弾圧の中、アブー・ザウバル刑務所で拷問死を遂げる。この話は、拙著『アラブ革命の遺産』でも紹介した（同 501 頁）。

「回想のカイロ」で、1960 年代初頭のサイードは、他のアラブの青年とともに熱烈なナセル主義者だった、と述べている。しかし、おそらく当時はすでに米国で暮らしていて、同時期にナセル体制の下で起きたハッダード医師の死は知らなかったのではないかと思う。ナセル体制は、フランツ・ファノンが言うところの「ナショナリスト・ブルジョアジー」による残忍な専制体制の一つであった。ファノンに学んだサイードは、植民地支配を脱したアジア・アフリカの国々に、どうしてこうした専制体制が出現したのか、という問いを立て、これに対して一つの回答を示している。それは「20 世紀後半において前世紀の帝国的サイクル imperial cycle が自己複製されている replicates itself」からだ、というものである［注 7］。

その場合、帝国支配の抑圧構造は、そのまま旧植民地の国々の抑圧体制として単純なか

たちで複製されることはない。多くの場合、必ずや何らかの屈折を伴う。そして現在、この「帝国的サイクルの自己複製」は、オスロ合意後のイスラエルと「パレスチナ」の間でも起きている、と考えられる。パレスチナ自治政府は、形の上では独立国家を目指すかのように偽装されているが、その実、入植型植民地主義の協力者として、その抑圧構造の複製として作られたものである。その一方で、その体制は、よく言われるように周辺のアラブ諸国の腐敗した専制的な体制にもよく似ている。ただし、それは考えてみれば当然のことである。イスラエルの存在そのものが、これまで地域のアラブ・中東諸国の抑圧体制の原因となってきたからである。

本稿の冒頭で述べたように、世界経済全体に深刻な影響を与えている「イラン情勢の悪化」の根本に何があるのかを、目を曇らせることなく、見据えなければならない。そこには、パレスチナ問題を中心に展開する「帝国的サイクルの自己複製」という不幸の渦がある。今も多くの人の犠牲を伴いながら、この地域全体を不幸に飲み込む渦がある。

＊　＊　＊　＊　＊

今号も最後にカイロに住むガザから避難して来たパレスチナ人について述べておきたい。1 月に二回にわたって何組かのパレスチナ人家族の方々と会うことができた。第一回は、ギーザのファイサル（国王）通り地区で、三組の母子家庭がともに暮らすアパートを、妻とともに訪ねた。喧騒の表通りから数百メートル中に入った路地の建物の階段は電灯もなく真っ暗で、半ば崩れている。しかし、部屋に入ると中はきれいにしており、玄関には子どもたちの靴がたくさん並べて置いてあった。お話できたのは、一人が風邪で寝込んでいるということで二人のお母さんだった。一人は夫をイスラエル軍によって殺され、もう一人はその攻撃で行方不明になりながら、2024 年 1 月と 3 月にガザから出てきた。

さて、この訪問の案内をしてくださったのは、「シリアの未来協会」のファーティマさんと、元エジプト外務省のカドリーさんである。お二人には、第3号で述べた昨年7月の「シリアの未来協会」が開催した、ガザから来たパレスチナ人の子どもたちを励ますフェスティバルでもお世話になった。

三組の母子家庭が住むファイサル通り地区の路地

この三組の母子家庭は、ファーティマさんが世話をしているスーダン人など 28 の避難民家族の一部である。彼女たちは、これまであるエジプト人の篤志家が支援を受けていたが、お亡くなりになり、その遺族たちには善意を継続する意志はなく、将来に不安を抱えている。

二回目は、1 月の末で 6 組の避難民の方々と会った。場所は「シリアの未来協会」の事務所で、ファーティマさんに紹介された。カドリーさんが通訳として手伝ってくれた。皆さんがガザから出て来れられたのは、エジプトで手術をした家族の介護のため、病気の家族の付き添いとして許されたから、あるいは 10・7 の攻撃以前に家族の病気の治療や手術のために来ていた、といった例がほとんどだった。とはいえ、会った人たちは、まだ恵まれた方であった。同じく病気を理由にガザから出ても、満足な治療を受けられずにカイロ郊外の衛星都市に放置されている人たちも数多くいる、という話を後で聞いた。

二回のインタビューとも主な質問として、子どもたちの教育について訊いた。何人は、カイロの北東の地区のパレスチナ人用にできた学校に通わせている、と話した。またオンラインの授業用あるいは試験用に携帯電話やタブレットなどの機器が必要であるという話も聞いた。カイロにいて自分たちに何かできることがあるか。とても自分たちだけでは助けようがない深刻なケースの話もいくつか聞いた。何ができるか、いろいろ考えているところであり、それについては、本勉強会のホームページやメールなどでまたお願いすることがあると思う。

［注 1］これは日本のメディアでハマースを紹介するたびに、「イスラム組織」という枕言葉が繰り返し付けられるのと同様である。イスラームとテロリズムの結びつきをサブリミナルに連想させる表現が無意識のうちに流通している。ハマースが日本にとってテロ組織なのか、まともに議論されたこともないまま、問題の本質を隠蔽するメディアの操作が行なわれている。

［注 2］長沢栄治編著『中東 政治・社会』アジア経済研究所、1991 年、第 1 章も参照。

［注 3］Samir Raafat, “Zionism on Kamel Mohammed Street,” *Egyptian Mail*, September 11, 1993 [updated 1996]. https://www.egy.com/zamalek/93-09-11.php

［注 4］Samir Raafat, “Yitzhak Rabin‘s Assassination and the Hassan Sabri Street, Murders, An Extraordinary Symmetry,” *Egyptian Mail*, December 9, 1995. https://www.egy.com/judaica/95-12-09.php

［注 5］原書: Edward W. Said, *Culture and Imperialism*, pp. xxvi-xxvii；邦訳該当箇所: エドワード・サイード（大橋洋一訳）エドワード・W・サイード『文化と帝国主義』みすず書房（上）27-28 頁。

［注 6］“Cairo Recalled: Growing Up in the Cultural Crosscurrents of 1940’s Egypt,” in Edward w. Said. *Reflections on Exile and Other Essays*. New York: Vintage. 2000.

［注 7］原書:p.19; 邦訳該当箇所:（上）58 頁。